

～豊かな心と確かな力 瞳輝く寒川の子～

寒川町立南小学校

研究テーマ：子どもたちが自分の考えを主体的に深め合う話し合い

1、実践の目的

今年度は、3年後の町内での研究発表を見据え、目指す児童像と研究テーマをもう一度見つめ直し設定することをを行った。

各学年ごとの児童の実態から、目指す児童像について話し合いを行い、テーマの設定を行った。今年度は、昨年度のテーマを踏まえ、各学年の児童の実態とそれに対する教師の願いを職員で話し合い、全国学力・学習状況調査の結果と併せ、目指す児童像を設定した。そして、目指す児童像についての議論の中で何度も出てきた「話し合い」を研究テーマの柱とし、「児童が主体的に深め合う話し合い」というテーマを設定した。

そして、研究テーマの実現に向け、講師の先生をお呼びし、講演会、研究協議会を行った。

2、実践の内容

(1) 研究経過

2学期に、研究授業を3回行い、研究テーマ実現のための手段として、「考えをもつ・話し合う・深める・全体共有・考えをまとめる」のサイクルや、話し合いの方法は効果的であったかの検討を重ねた。そして、その中の課題について、講師の先生をお招きし、ご講演を頂いた。12月の講演会では、研究テーマ「児童が主体的に深め合う話し合い」の研究を進める中で課題となった「深い学び」についてご講演頂いた。

3学期、1月の研究協議会では、研究を進める中で課題となった、「自分の考えを持ち、主体的に話し合いたくなるためのしかけ」の入った授業づくりについて、研究授業を行った。2学期に出てきた課題や講演会を踏まえて、子どもたちの考えの中に「ずれ」が生まれ、話し合いが深まるような授業を検討し、実施した。その際には、職員での研究協議を行い、講師の先生によりご指導を頂いた。

(2) 講演会について

12月12日に行われた講演会では、山梨大学教授の茅野政徳先生をお招きして、「深めるとはどういうことか」についてのご講演を頂いた。特に、深い学びに至った姿とはどのような姿なのか、また、話し合い活動で深い学びにつなげるにはどうすればよいかについて、国語の授業を中心にお話頂いた。

「深い学び」については、

①知識を相互に関連付けてよく理解する

②情報を精査して考えを形成する

という2点について特に詳しく教えて頂いた。①については、「過去の学びを活かす」児童の姿を中心に、教材の系統性を意識した指導や、掲示物、ノート的重要性について実践例を交えてお話頂いた。②については、「ずれ」をキーワードに、話し合いが自然に深まるような授業のしかけを、実践例を交えてお話頂いた。また、最後には、①②を踏まえた上で、「表現」における難しさや語彙の重要性についてもご助言を頂いた。

(3) 研究授業・研究協議会の様子

1月31日に第6学年国語科の「海のいのち」で研究授業を行った。児童が自分の考えを持ち、主体的に話し合いたくなるためのしかけとして、「太一の生き方に共感するか?」という問いを設定し、意見のずれを生み、お互いが多くの叙述を根拠として話し合う中で、学びが深まっていくことを目指した。協議会では、KPT法(Keep、Problem、Try)を用いて、児童側・教師側授業の振り返りと協議を行った。

その後、講師の茅野先生に、授業内での子どもの姿を中心に、主体的に深め合う話し合いと、その話し合いを生むための意図を持った教師のしかけについて、実践を中心にお話頂いた。また、基礎的な読みの重要性を中心に、物語文の教材研究の方法や、指導事項の明確化についてもご教授頂いた。

3、実践の成果

成果の一つ目は、「児童の実態や教師の願いを踏まえたテーマを設定できたこと」である。今年度は、各学年の児童の実態とそれに対する教師の願いを職員で話し合い、全国学力・学習状況調査の結果と併せ、目指す児童像を設定した。その結果、「自分の考えを持ち、自分と違う意見について考え、意見の違いなどを楽しみながら考えを深めたり、広げたりすることを通して、課題解決に取り組む」という姿を、学校全体で共有することができた。職員全体で話し合いを何度も重ねたことで、より南小学校の実態に合った児童像を見つめ直すことができたと感じる。そして、目指す児童像についての議論の中で何度も出てきた「話し合いを通して、自分の考えを深める」という研究テーマの柱を確立することができた。

二つ目は、「話し合いを意識した授業実践の積み重ねができたこと」である。研究テーマの実現に向けて、「考えを持つ・話し合う・深める・全体共有・考えをまとめる」という授業内のサイクルと、話し合いの方法について、2学期以降実践・検討を重ねることができた。職員全体で学年毎の到達目標や授業の流れ、課題について議論が深まった。

4、今後の展開

来年度に向けた課題は、次の二つである。一つ目は、「児童が自分の考えをしっかりともてるような課題設定を考えること」である。今年度の実践で、「考えをもつ」ことの難しさや重要性が上がった。児童が進んで話したくなる考えをもつために、授業内でどんな手立てを講じればよいか研究を進めていきたい。そのヒントとして、講演の中で、「ずれ」というキーワードを頂いた。授業内で「ずれ」が起きると、聞く必然性、話し合う必然性が生まれ、話し合いが主体的になり、学びが深まっていくというお話を頂いた。来年度以降は、「ずれ」を生むための教師のしかけについて、研究を進めていきたい。

二つ目は、「各学年の目指す児童像を明確にし、系統性を確立すること」である。実践・検討を進める中で、各学年におけるテーマの実現について、どこまでを目標とするかが度々議論に上がった。また、教材の系統性を意識した指導についても、講演の中でお話をいただいた。来年度は、系統性を意識した各学年の目標を設定することで、職員全体が同じイメージを持って授業に取り組めるようにしていきたい。